

**秋元康幸（あきもとやすゆき BankART 副代表・元横浜市都市デザイン室長）ヒアリング記録**

**2022年6月21日（火）午後3時より4時**

**BankART KAIKO 事務室**

**NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会 田口俊夫・青木淳弘**

青木 ありがとうございます。長々と問題関心を書いているのですけれども。私たちはずっと、都市デザインの歴史的な検証を行っていきまして、こちらでも50周年の展覧会に伺いました。目下の目標では、11月にニュージーランドのオークランドで、田口さんと一緒に都市デザインの歴史の中で特に文化行政との関係の話をします。

秋元 文化行政に着目したということですね。

青木 そうですね。文化っていう概念が良くも悪くも曖昧なので、曖昧ゆえに可能性も高いものを含んでいて。だから、文化行政。都市デザインが、どうしてもフィジカルなものに注目がいきがちなところを、もう少し幅広い文脈から評価できないかということはずっと考えながら研究を続けています。実は秋元さんの書かれたものも拝見しました。どんなことをお考えになりながら、例えば創造都市事業だとか、あるいは都市デザインだとか、事業に携わっていらっしゃったのかなっていうことを伺えたらと思っております。そういう意味で、このお送りしたメールの下のほうにいくつか項目を挙げさせていただいたんですけども、この辺のですね。

秋元 メールには、文化としての都市デザイン・・・と書かれていましたね。

青木 そうですね。だから、都市デザインの始まりは歩行者空間の整備とか、そういうところから入っていると思うんですけど、多分もうちょっと歴史をひもといてみると、田口さんの言葉を借りると、センスオブプレイスといった言葉になっていくのですよね。今回お聞きしたいところと直接は関係しないかもしれないのですけれども。以前、鈴木伸治先生が講演録を「都市をデザインする仕事」という本を書かれていたんですけども。あの中に秋元さんの文章がありまして参考とさせていただきました。

秋元 これですね。

青木 そちらですね。そこに、文章が載っている。

秋元 これ、だいぶ前ですね。

青木 5年ぐらい前の文章なんですよ。そちらを見ているときに、創造都市は都市デザインだっという形で位置付けを与えてらっしゃったと思うんですけども、創造都市事業に携わる中で、都市デザインの延長として位置付けられていたというふうに私は理解したのですが、その点はいかがでしょう。

秋元 そう考えています。

青木 とりわけ新しさを何かしら見出したのかなって思うのですが、どういったところに新しさがあったのかを聞いてみたいです。

秋元 都市デザイン自体が近代都市計画の反省、効率的な都市づくりから反省して、もっと人間的に魅力的な街を作っていこうというところから始まったと、私は認識しています。

その中で、最初は車社会への反発があったと思うのですが、歩行者空間を大切に、人が歩く都市を魅力的にするところから始まったと思います。文化としての都市デザインということは、当時はあまり考えてなかったと思いますが、結局、文化は都市の中で、人のいろいろな活動というか、行動の積み重ねですよ。そのあたりは、都市デザインは大事にしていまして、その後、歴史をいかしたまちづくりもやっていますが、歴史・文化をどうやって大切にしていくか、そういったところにも入っているので、人間がその都市の中でずっと積み重ねてきたものは大切にするといったところは、都市デザインの根本的な考え方であったと思います。その中で、いろいろなパターンを展開してきたのだと思います。

都市デザインは非常に分かりにくいと言われるのですが、都市ごとに都市デザインは違うのです。都市の歴史も違うし、都市で生きている人も違う、その中でより人間的、魅力的な都市を作ろうということになると、その都市の植生とか地形とか水とか、海とか、歴史とか、文化とかというところに着目して、そこを基礎にした魅力を作っていくことをやらなければいけないのです。それで、都市ごとに、地域ごとに都市デザインは異なってくる。横浜でやるのと、神戸、大阪でやるのは、そこに住んでいる人も文化も違うから、都市デザインは違ってくるのが当たり前だし、違わなくてはいけないのです。

その中で横浜ならではの、いろいろなパターンの都市デザインを、分野ごとに生み出してきた歴史があって、田口さんも苦労されてきた歩行者空間の整備から始まって、水・緑とか、歴史とか、横浜をどうやって都市として魅力的にするかということ、いろいろなことでチャレンジしてきたのが都市デザインだったと思うのです。

そういった認識に立つと、常に都市デザインは変わっていくというか、その時代でまた新しい魅力を付け加えていく作業が始まる。時代が変わると、その都市の文化も歴史も少しずつ変わっていくので、その時代の課題とかも踏まえながら、新しいところにチャレンジしていくところが出てきて、その一つが、北沢先生が始めようとした創造都市の分野だったのではないかなと私は思っているのです。

青木 なるほど。北沢先生って、もともと歴史的景観の保全にすごい力を入れてらっしゃったじゃないですか。その点は、やはり、創造都市事業において、秋元さんもかなり意識としては強かったですか。

秋元 北沢さんは、最初に横浜の歴史的建造物を残すところからやっているのですね。最初は単に景観として残すところが重点だったのですが、北沢さんの頭の中には、どう活用するか、という課題がだんだん出てきた。時代は低成長の時代になってきた中で、ただ単に残すということだけでは、北沢さんは十分でないと思ってきて、景観として残しつつどう使っていくか、どうせ使うのだったらそれを使うことによって、都市が活性化しないかと考えていったのではないのでしょうか。経済が伸び悩み、人口も減り始めた時代の中で、どうやって街を元気づけるかという課題に使ったほうが良いという考えが出てきたと思います。それが創造都市の最初のきっかけだったのではないかとと思われるのです。

創造都市の前の時代にも北沢さんは、若手の建築家を横浜に呼び集めているのですよ。高橋晶子さんとか、飯田善彦さんとか。今は有名人になっていますけど、若手の建築家に「横浜の歴史的建物の中で事務所、構えたらどうだ」と勧めていた時代がありました。クリエイティブな人は、歴史的建造物や港がある横浜の雰囲気が好きだった。そして、クリエイターたちが横浜に集まってくることによって、町が少しずつ面白くなっていく、いろいろな活動が始まるってイメージは持ちつつ、創造都市の基礎をつくりはじめたと思います。

青木 だから、創造都市が先にあったというよりは、もう構想があって、そこに創造都市という概念があったってということですかね。

秋元 文化芸術・観光振興による都心部活性化委員会を作った時、秋元も作業に加わったのですが、委員会つくった当初、北沢さんはクリエイティブシティという経済の概念は、知らなかったみたいですよ。

青木 そうですか。

秋元 横浜市大の鈴木先生にこの辺は聞いていたのですが、委員会の途中ぐらいで、鈴木先生に、ランドリーが創造都市という概念を言っている、委員会の議論は、このまま創造都市、クリエイティブシティと、言って良いのではないかということ、北沢さんは鈴木先生に話したそうで、途中から合体して政策をつくっていった、そんな感じみたいです。

青木 フロリダとランドリーの議論って、2000年ぐらいじゃないですか。それより前に、そういう活動してたんだらうなっていう気はしたのです。というのも1990年代前半ぐらい

に、みないとみらいで創造実験都市っていった。創造都市というのがそんなに知られてない頃から、結構、都市デザイン室の西脇さんとかもされてたんですよ。そういう活動の中で、後から出てきたのかもしれないと思っていたのです。

秋元 そう、創造実験都市という言葉は、北沢さん、随分前から使っていましたよ。

青木 そうなんですね。

秋元 当時は、実験都市とは何だ、実験して失敗することもある都市づくりはけしからんと、怒られながらも使っていました。ランドリーの創造都市の概念自体が経済学ですよ、基本的に。都市計画系ではない、だから後で気がついたという話です。

青木 そうなのですね。創造実験都市っていう名前は、みなとみらいから、なくなっちゃったんですよ。その後、2002年ですよ。創造都市になっていったので、その関係ってというのが、私、見えていなかったものですから。

秋元 創造都市的な発想は、北沢さんの頭の中で着実に、少しずつ展開していったと思います。

青木 ベースには歴史的建造物があって、その保全・活用の方法の探る中で、いろんなものを、いろんなクリエイターを入れたという試みをされてたって話なんですね。

秋元 秋元も都市デザイン室に入った時、北沢さんから「おまえ、デザイン室でどこの穴を掘るのだ？」って聞かれたとき、現代アートが好きだったので「現代アートとか、イベントとかやってみたいのです」のような話をした。駄目だって言われるかなと思っていたら、北沢さん、割とすんなり受け止めてくれて、では調査やろうかという話になり、世界のデザイン展の調査をしました。そのとき、ベニスのパビリオンなど、世界のデザイン、アート系の展覧会の調査を、86～87年頃でしたかやりました。

青木 そうですか。じゃあ、その頃から、もう現代アートについて。

秋元 現代アートと都市デザインの可能性もあるかもしれない、そういう感覚は持っていて、その後に南條さんにも知り合っているんで、南條さんと組んで金沢区でアーティストが絡んだ庭、造っています。そういうことを実験的にやってみて、だんだんとくっついてきたのだと思います。

青木 その辺の、もう少し調査なんかについての関連するかもしれないんですけども。創造  
境界は創造都市事業の中の中核ですよ。そこで横浜らしさっていうのを強調されている  
と思うんですけども、この横浜らしさっていうのについて、具体的なビジョンがあったの  
かについても伺いたいのですが。

秋元 北沢さんというか、私たちがということですか。

青木 そうです。

秋元 創造都市の委員会では私、手伝ったんですけど、その後、戸塚の再開発をやること  
になり、戸塚の再開発の事務所に移って、そっちのほうで忙しくなってきたので、その当初の  
ところが抜けている時代があるのですよ、私。

青木 そうでしたか。

田口 そもそも、じゃあその委員会は中田さんになってから、当然、立ち上がった。

秋元 そう。

田口 そうだよ。

秋元 委員会は中田さんが市長になって、北沢さんが参与になり、低成長時代の中での都心  
部の活性化ということで立ち上げたのが委員会なのですよ。私はそのとき建築事務所  
にいて、確認申請していたんですけど、なぜか北沢さんに呼ばれて「ちょっと手伝って  
くれ」と言われ、辞令まで出て、この委員会の資料作りをやっていました。2年間やっ  
ていたんですけど、途中から、戸塚の再開発が忙しくなって抜けている中で、この第  
一銀行の公募要項が出ているはずなのですよ。公募要項は、2003年ですよ。

青木 そうですね。

秋元 先ほど、僕も池田さんが亡くなったときに BankART はどうやって生まれたかを見直  
してみたんですけど、このときに北沢さんがどこまで意識していたか、というところ  
なのだと思うんですけどね。でも、アートを絡めると面白いという感覚は、北沢  
さんにはあったと思うのです。どこまでどういうことができるかは、まだよく分  
かっていなかった。実験的にやってみようということで、動かしたのだと思うの  
ですよ。この提案の募集要項を。

青木 ここはまだ、具体像が見えているというよりは、保全の流れの中から、もっと実験的にやってみようっていう勢いなのですね。

秋元 途中で理念と体制が書いてありますが、新しい横浜文化を創造し、発信します、とか。NPO を中心として運営を行います、とか。産業への展開を生み出しますという、この辺が、骨子、理念と体制ということなのですが、逆に、このくらいのことしか言ってないのですよ。最初のときは。

青木 この新しい横浜文化っていうところですよ。

秋元 アーティスト、クリエイターたちを呼び集めるということは打ち出した、ということだと思います。

青木 何となくなんですけども、横浜外から見て、結構、横浜って文化が強い町だになってイメージはあるのですよね。そこで、あえて、新しい横浜の文化っていう形とか、横浜らしさっていうのを、あらためて打ち出す意義っていうのに引っかかったのです。何かそこで目指したものがあるのかなっていうのが気になったんですよ。

秋元 このときは、北沢さんは東大の先生をやっていたので、日本国中でそういうまちづくりの団体と付き合い合っていた頃ですね。まちづくりの中では「よそ者、若者、ばか者」という言葉があって、その地域の人だけでやっていると、なかなか新しい展開ができない。その地域の人によそからきた人の知恵が入ってきたときに新しい展開ができる。そういう言い方をよくするのは、北沢さんは分かっていたはずで。横浜の中で、横浜の人だけで議論して、作っていくよりは、他からの知恵を突っ込んだほうが面白いことができるという意識はあったと思います。

青木 田村明さん、昔、シューマイ文化って言って、書いてました。そういう流れが、まちづくりの潮流にあるのかな、なんて。

秋元 田村さんは、もともと、そういう考え持っていたかもしれないですよ。田村さん自体もよそから入ってきた人なので。

青木 だから、神戸の洋菓子文化に対して、横浜はシューマイ文化だっていうふうに、調査季報に書いてたんです。

秋元 そんなこと書いているのですよね。

田口 相当、古いやつね。

青木 そういった形でやっているの、横浜っていうのは、飛鳥田市政の頃から東京に対抗する新しい横浜文化なんだっていうのを、結構ずっと言っているのですよね。

秋元 言っていますね。

青木 それが、継続されているのか、それとも創造都市の段階でまた何か違うものを入れたかったのかっていうのが個人的に気になる場所だったんです。だから、その文化がどういう意味を持つのかなって思ったのです。

秋元 新しいことを生み出さなくてはいけないという意識はあったと思うのですよ。経済があんまりうまく回らない時代で、横浜はこのまま沈滞化するという危機意識はあったと思うので、今でいうとイノベーションみたいな話ですよ、それをどうやって、やっていくかというところに、新しいアーティスト、クリエイターたちによって、ちょっと刺激物を入れて、横浜を新しい展開で変えていったほうが、面白い町ができるのではないかという意識があったと思うのですよ。

青木 常に新しいものをついて、貪欲な姿勢を感じますよね。

秋元 都市デザイン室はそのような人間たちが多いので。

青木 それが活性的、すごくユニークな試みとして内外に評価されているんだと思うんですが、そのときに気になるのが、この間、質問に入れさせていただいてる、創造的人材として、アーティストやクリエイター、入れるっていうんですけれど、アーティストやクリエイターの具体像っていうのがあったのかなっていうのが、気になるのですよね。

秋元 北沢さんがどこまでアーティストやクリエイターの具体像があったのかは、よく分かりません。建築家や、その辺のクリエイターたちは、ある程度分かっていたけど、アーティストの具体像がどこまで、どういったことになるのかは、いろんなアーティストと付き合いだったので、ある程度は分かっていたかもしれないですけど。アーティストは相手によって全然、違いますよね。クリエイターは、建築家とかグラフィックデザイナーとか、僕も付き合いがありますが、大体、分野でパターンが分かりますけど、アーティストは分からないですよ。相手がどういう着想するか、どういうことをやりたいと言い出すかによって全然、違ってくるところがあって、そこまで具体像があったかって言うと、アーティストのほうはな

いかもしれないですね。だから、既存の横浜らしさはアーティストに求めているのですよ。

青木 なるほど。アーティストを入れることによって、新しい横浜らしさが・・・。

秋元 横浜の文化や、シューマイの文化と、新しいアーティストがくっつくことによって、新しい面白いものがないかという発想なので。入ってくるアーティストには、だから、横浜らしさっていうのはあまり求めているのですよね。

青木 なるほど。だから、アーティストはもう別に、像が具体化しないことこそが重要だったってことですかね。

秋元 そこが、また、創造都市の面白さでもあるし、難しさでもあるのですけどね。

青木 なるほど。そうですね。一方で、人材を育成するっていう考え方もあるのじゃないかと思うんですよ。そういったことは、この創造都市としては、そんなに想定してなかったわけで、呼び込むってほうが重要だったんですかね

秋元 創造都市はBankARTもそうなのですが、あそこで、池田さんと北沢さんが出会ったわけなのです。旧第一銀行の実験的な活動の公募のときに、池田さんが取って、入ってきたのですが、池田さんはPHスタジオという、自分たちもアート活動をやってきた人間なのです。当初は池田さんと北沢さんが創造界隈拠点でどういう運営していくかを、多分、議論したと思うのですよ。北沢さんは随分BankARTに通っていたという話を聞いています。その中で、この拠点をどう運営していけば、横浜の街が面白くなるか、都心部が活性化するかという議論はしたと思います。だから、育てるというよりは、一緒に作っていくという感じだと思います。アーティストはそこが非常に面白いところでもあるし、難しいところだと思うのですけど。

青木 そうですか。

秋元 アーティストを育てるというのは、言い方としては上から目線ですよ。でも世の中のアーティストは勝手に成長していくのですよ。僕なんか育てようと思っても、その通り育つわけはなくて。横浜という器の中に入れて、勝手にそれを吸収して作品を作っていくのですよ。

それまでの都市デザインは、専門家が歩道や広場をデザインしてから、その案を市民と議論していくという主導権が行政側にあったと思うのですけど。創造都市は、ほぼ対等の立場になっているのですよ。市民参加型というよりは、パートナーシップ型になっている。アー



ティストたちがどんなことをやりたいかを受け止める側にもなってくるし、アーティストが上で、俺たちはこういうことやりたいのだから、横浜で何とかなんないのと言われ、どうやって実現させてあげられるかというところがあります。アーティストのアイデアと都市づくりが相反するときもあるし、そこをどうすり合わせるかが、行政側とアーティストの戦いでもあるし。だから、そこは面白いけど大変なのですよ。

青木 なるほど。

秋元 たまたま池田さんはアーティストでもあるし、その前に北川フラムさんのアートフロントでギャラリストとしても活動していたので、つなぐ役割も訓練されていた人なのですね。彼が入ってきたということは、横浜の創造都市の中で、アーティストと都市の間をつなぐということも分かるし、彼がやっていたPHスタジオ自体が都市の中で活動するアーティストだったので、ホワイトキューブの箱の中だけでアート作品を作るのではなく、町の中に出ていく作品作りをしていた団体なので、そういった意味では親和性があったのだと思います。そんな偶然の重なり、人との出会いもあったと思います。

青木 そこは重要ですよ。結構、属人的な部分だとは思いますが。事業だけを見てみると映像系大学院、芸大の誘致なんかしているんで、結構、そういう方向もあったのかなと思うんですけど。

秋元 創造都市の中でアーティスト、クリエイターたちを誘致してきて、都心部の活性化につなげる政策の一つとして、経済としても回せそうなのが、映像文化ではないかという考え方がありました。映像文化系の大企業が、みなとみらいに来そうだという話もあって、映像文化都市構想があったのです。

青木 そうでしたか。

秋元 映像系、ゲーム系の会社が、みなとみらいに来るということであれば、横浜は、映像文化で頑張るのだと打ち出して、芸大も誘致して、映像文化系のアーティストも集まってくると、みなとみらいでは大企業が入ってきて、関内では、若い人たちが起業するとか、IT系も含め映像系の個人事業主や小さなグループは関内に入ってもらおうというように、北沢さんは、都心部の中でそういうすみ分けをしながら、横浜の街をつくっていくのだという意識を持っていたと思います。

青木 なるほど、そういった背景で。

秋元 でも当時、結果的にバブルがはじけて、そのような映像系の大企業が調子悪くなり、横浜に来てくれなくなってしまったのですよ。

正直、当時、みなとみらいでの大企業誘致は頓挫したのですよね。映像文化都市構想というのは。今になって、またみなとみらいには、研究所系の建物が集積始めましたけど。

青木 そうなんですね。なるほど。そこが、なんであれだけがぽんって出てきてるのかなってのは気になっていたのですけど。経済状況が関係しているのですね。

秋元 当時は、読み間違いをしたということだと思います。

青木 なるほど。

秋元 北沢さんもなくなる少し前には「秋元、映像文化、もうそろそろ、見直ししないといけない」みたいなことを言っていました。

青木 そうですか。

秋元 多分、本人も読み間違えたという認識はあったと思いますよ。

青木 なるほど。その辺があるわけですね。こちらの最後のところで、事業本部は今おっしゃったような形で、アーティストとかクリエイターとのコラボレーションっていうのは結構強い部分だったと思うんですけども、例えば、横浜市の他部局との連携がほしいと思うような場面ってあったのですか。

秋元 創造本部のときは他の部局との連携はしていましたよ。もともと、旧第一銀行の運営者を募集したのも都市整備局なのですよ。

青木 あと市民局ですか。

秋元 公募要項には、横浜市と書いてありますが、担当部局は都市整備局なのですよ。その後、事業本部ができてから引き継がれるのです。まちづくりを意識したいたので、都市整備局とはかなり連携していたことは間違いありませんし、アーティストとかが、あれやりたい、これやりたいって言って、港で出てくれば港湾局と調整しなくてはいけなし、道路上だと道路局と調整しなくてはいけなし。結局いろいろな部局と調整しないとできなのが創造都市なのです。

田口　そうですね。その部分っていうのは表面には出てこないですけども、実際、調整が必要だったりということはたくさん。

秋元　たくさんありましたよ。アーティストは横浜だと海側でやりたがる人多くて、港を使いたい人が多くて、そのたびに港湾局とは調整して、土地を借りたいとか、場所を借りたいとか、やっていましたね。

青木　割りとそれはスムーズに貸してくれるのですか。

秋元　スムーズにいくときもあるし、スムーズにいかなときもある。

青木　それは、でも、やはり基本的にはアーティストだとか、クリエイターの人が提案するのが先行するのですか。

秋元　新港ふ頭を使ったときも、その先にあるメガフロート使いたいとの話がでて、一回だけだったらいいよとか。そういう交渉の中で進めていました。

青木　なるほど。事業本部というのは調整役が多かったわけですか。それとも企画というか、自分からいろいろ仕掛ける方だったのですか。

秋元　大枠の企画は事業本部がします。トリエンナーレやりたいとか。それで出てくる案は、アーティスト側が作った案が出てくるので、それを見て、また調整しなくてはいけない、それはまた事業本部の仕事ですよ。

青木　なるほど、そういった役割では、相当、大きな形でやらないと難しかったんじゃないかなと思うんですけど。

秋元　事業本部のときは、創造都市を全市的にやっていく本部という位置付けがあったので、まだやりやすかったのですが、文化観光局になってからは、少しやりにくくなった面はあるかもしれません。

青木　そうですね。

秋元　中田市政の時は、横割りの体制でやれていたのですが、林市政は、各局が競うような体制になってきましたね。今、職員はかなり頑張っていますけど、少しやりにくいところがあるかもしれません。文化観光局の中だと、創造都市政が文化政策の一つのような形に見え

てしまうところもありますね。都心部の活性化という都市政策なのだという位置付けが、薄くなってしまう危険がありますね。

青木 そのように感じる。それは、首長、要するに、中田市政から林市政に移行したっていうことが大きかったというふうに思いますか。

秋元 市役所はそういうものですから。首長が最終的に判断するので、その時の市長が理解するかどうかは非常に大きいですね。市長は、4年単位で選挙があるので、長い時間がかかる都市づくりとは、少し感覚が異なる点があるとは思いますが。若いアーティストを育てて、横浜から新しい文化を発信していくのも時間がかかりますから。

青木 なるほど。

秋元 北沢さんは、文化から産業への波及のことは狙っていたと思います。映像文化都市でも、アーティスト、クリエイターたちを集めるだけでなく、さらに産業化していった大企業と結び付けていくような話は狙っていたと思います。みなとみらいなどの新規開発と、関内のような既成市街地でどう役割分担するかを、北沢さんは考えていた。みなとみらいでは民間も含めて立派なホールができ、そこではすばらしい文化芸術が発表されている。しかし、若いアーティストは家賃が高いみなとみらいでは生活しにくい、関内などの既成市街地で、若い人たちが、横浜の街から刺激を受けて育っていくように、創造限界や限界拠点をつくっていく。最終的にはみなとみらいのような所で発表できるようになっていく。横浜の街全体の中で、アーティスト、クリエイターたちの活動がどう関わり、変わっていくのか、横浜の中でも地域の役割というものを考えていたと思います、北沢さんは。

青木 そうですね。それは、でも、やはりすごく長期的なビジョンの中でやらないと動かないはずですから。

田口 だから、そもそも中田さん自身はそういう理解度と。

秋元 中田さんは政治家だから、例えば低成長時代の都市の活性化という政治目標の下で、細かい政策は信頼する人にまかせていたと思います。北沢さんには参与でしたから、都市づくりについては、かなり任せられていた。成果ができれば、それは中田市長の成果になるわけです。政治家としての出番は必要でしたが、北沢さんはやりやすかったのではないのでしょうか。

田口 なるほどね。

でもそうすると、北沢さん、東大の先生で、形式上は外部じゃないですか。そうすると、内部を任されて動かすメンバーの中に秋元さんもおられたと思うけど、そういう人たちはつくり込まれていたわけですね。

秋元 北沢さんは参与で外部の人とも言えるのですが、行政経験もあるので必要な手続きはしっかりとやっていました。創造都市政策もこうやりたいという私案はあったと思うのですが、中田市長とも相談して委員会を作って、様々な分野の人と2年ぐらい議論して方向性を出し、事業本部という集中して事業を推進する組織もつくって動かしていった。政策論と体制づくりも、いきなりではなく、時間をかけてしっかりと議論して周囲が納得した上で進めていました。

青木 現在の創造都市政策だったり、今後の創造都市政策に対して、秋元さん自身が期待することだとか、こうなったらいいんじゃないか、みたいなことはありますか。

秋元 これからやりながら考えないといけないのですが、当初のころと状況がだいぶ変わってきています。北沢さんも、BankARTの池田さんも亡くなってしまった。第1ステージは、終わりに近づいている感じですね。そして、アーティスト、クリエイターたちは、かなり関内に集まってきています。みなさん、それなりの思いを持って横浜に来ています。だから、ミニBankARTのような活動がかなりできてきています。

例えば関内外オープンといった、街の中で自分たちの事務所をオープンにするイベントを、彼らは自主的に開催しています。

今までは、BankARTのような創造界隈拠点や、横浜の創造都市を引っ張り、外部に発信していたのですが、これからは、街の中の小さな活動かもしれませんが、そういった活動をうまく見せてつなげていくやり方が、そろそろ良いかなと感じています。誰かが引っ張っていく時代から、みんなが色々な活動をしている時代になりつつあると感じます。

青木 20年の蓄積っていうのは結構、大きいわけですね。

秋元 大きいですよ。

青木 その中で例えば BankART が果たす役割っていうのは、そういう人たちをつなげるっていうことなのですかね。

秋元 先日行った「池田修を偲ぶ6日間」でも、相当の数の人間が集まってきています。池田さんがやってきたことに対して、関わってきた人がいっぱいいるわけなのです。古い建物をリノベーションして、シェアオフィスにすることも、池田さんが始めたのですよね。あ

れ。

青木 そうなんですか。

秋元 北九州のノベーションまちづくりは有名ですけど、そこでやっている嶋田洋平さんも、もともと、横浜のみかんぐみにいて、池田さんがやった「Brick & White」、再開発予定地の古いビルを森ビルから借りて、その中にアーティスト、クリエイターたちが50グループほど入る、大規模シェアオフィスを作ったのですが、彼はそれを経験して、九州でも実践しているのですね。

横浜では、北沢さんが建築家を誘致していたので、安くかつこよくりノベーションができる土地があった。それを嶋田さんは一緒にやっていたから。嶋田洋平さんの話を聞くと、全部、横浜で教わったことを北九州で展開していますと、彼は言うのですよ。

青木 そうですか。そうすると横浜一つの規模に留まらない流れができてきているような気がしますね。北九州しかりですけど。

秋元 結局、創造都市の活動は、横浜市と議論してBankARTは横浜で活動していますが、朝鮮通信使などの、海外の韓国や台湾とのアーティストの交流は、横浜の文化観光局に収まらないことを勝手にやっちゃっている。そこでは、文化観光局の金は使っていないだけで、NPOは稼いでも良いので、稼いだ分でこっちの事業をやっていますよと。だから横浜市の税金は使っていない海外交流をやっていますよという言い方で、勝手に動きはじめています。そこは創造都市の面白いところですよ。横浜市が想定していた以上のことが、どんどん起きてきています。

青木 そうですよ。逆にいうと、そうすると横浜市は何をしたらいいんだろうって問題も出てくるかもしれないですけど。文化観光局に位置付いている創造都市担当課は一体、これからどういう役割を担っていくべきなのかっていう。

秋元 都市政策としての創造都市の全体の方向性は、ちゃんと考えたほうが良いと思います。僕がBankARTに入ったというのは、横浜市との間つなぐ役目もあると思っています。だから、BankARTだけでなく、横浜市内の全体でやっていること、想定以外で始まっている活動を含めて、まとめて見せるようにするのはやるべきだと思います。

アーティスト、クリエイターだけでなく、横浜には経済局が力を入れているイノベーターも大勢いるのですよ。IT系ですね。アーティストより、もうちょっと稼げる人間たちですね。そういう人たちとも連携するとか、みなとみらいの大企業と関内のクリエイターたちが連携していくとか、やろうと思えばいろいろなことはやれると思います。まだまだ、創造都

市ということだけでもね。そういった人たちが入ってきて、都市が面白くなるように動かしていくという大きな方向性を出していくのは市の役割だと思います。

だんだんと行政は金がなくなってくるから、でも金がなくても、NPOが稼ぎながらやってくれるし、経済として少しでも動いていけば、相乗効果で横浜に集まってくる人を増やすこともできる。でも、看板がないといけない。横浜市は政策として創造都市をやっている、頑張っているという看板がないと、大きな動きになれないし、何もなかったことになってしまう危険があるのでね。

青木 やっぱり、その看板を与えてあげるっていうのも役割ですか。

秋元 私は必要だと思うのだけどね。今度の市長がどう判断するか、どこに戦略を持つかは、僕もまだよく分かってないところがあります。また、創造都市の18区展開という話もあるのですよ。

青木 そうですか。

秋元 今の創造都市政策は都心部の活性化が目標です。郊外区、住宅地のほうにも展開したほうが良いという議論はあるのですよ。都心部は都心部の地域課題があって、どういうアーティストが入ってくれば、どのような展開ができるかということなのですが、これが住宅地だと定住している住民の中に、住民と協調性が全くないようなアーティストが入ってくると嫌われるだけになる危険もある。

青木 そうですね。

秋元 人口減少と高齢化の中で、都心部と住宅地では活性化の意味も違うし、郊外住宅地では、経済より住民がいかに元気に活動するような政策ができるのかを考えないといけない。都心部の創造都市とは違って、同じようなアーティスト、クリエイターを誘致する政策ではなく、地域やそこで暮らす住民にあった政策論が必要だと思います。

田口 今のコロナで、働き方がちょっと違ってきたじゃないですか。そういうものも、うまく取り込んでいくということですか。

秋元 横浜の郊外は、田口さんご存じのように、高級住宅地を造り過ぎています。第一種低層住宅専用地域と市街化調整区域だけで横浜市域の約半分の面積を占めていますよね。それは人口急増時代の住宅抑制策だったのですが、横浜市は住宅開発に対して規制をかけ、高級住宅地指向の政策をとってきた経緯があります。それが今、用途純化しすぎて住む機能以

外はない。働く場所も少なく、オフィスワーカーはテレワークしようとしても、自宅でやるしかなくて、家だと子どももいて赤ちゃんもいて、いろいろと差支えがある。だったら駅周辺にでもテレワークできるような場所を作ったら良いのでは、もう少し働ける場所を作ったらよいのではと、そう思うのだけど、なかなかそう動いてない。

その中で、創造都市政策としてはどういうことができるかは、都心部とは違った展開の可能性があるのでないかと思っているのですよ。

田口 さっき言った、イノベーターってどこでも仕事しながら、どこでも稼ぎますよっていうイメージあるんだけど。それって、横浜の看板のところでやると、彼ら、彼女らにとっては何のメリットがあるんですか。

秋元 オフィス賃料が安いメリットがあります。東京に近いのに、賃料が半分ぐらいで借りられます。彼らにとって仕事はどこでもできるのですが、何らかの形で仲間がほしいのですよ。だから、関内周辺には多く集まってくる。

それがテレワークでどう変わってくるはもう少し議論しなくてはいけないのだけど、テレワークが浸透してきても、全部のIT系の企業、勤めている人が自宅で仕事するかというと、多分そうはならないと考えています。

田口 ならないでしょうね。疲れちゃうので。

秋元 そこで、僕も退職後は、かなり家で仕事やっていますが、仕事と家事の区別がつかなくなってきた、効率が悪いと感じています。

田口 そう、それと、やはり人と会うことが全く必要だし、新しい発想や考え方を展開するためにもコミュニケーションは、当然必要だし。気分を変えるっていうのも、すごく必要だし。だから、そういう意味でいうと、大きな流れはいいとは思うんだけど。看板を掲げる横浜市がなんかのお手伝いをしますよっていうのが出てこない、じゃあ北九州でもいいですね。埼玉でもいいよねっていう話とどこかで差別化が、都市経営論としてないといけないですよ。

秋元 郊外も駅周辺と、駅から離れた住宅団地では違う状況があります。駅周辺には、もう少し働く場所とか、飲み屋とか、都市的な機能を少しずつ誘導していったらよいのではないかと思っています。郊外の駅周辺にはテレワークの拠点を作るとか、郊外部でも働く場所の拠点ができてくれば、そこに鉄道を使って、その区だけでない、他の区から多様な人が入ってくる可能性がある。そこで都心部ほどではないけど、人の交流が進むと良いですね。働く場所だけでなく、アートや文化、趣味や小商い、NPOなど郊外部ならではの拠点が駅周辺



には作っていくほうが良いのではないかと、仮説としてですが、今思っています。その辺が、創造都市の新しい展開として、あるのではないかな。

青木 そうですよ。

秋元 寿で活動している岡部さんは、シェアキッチンを郊外区展開しています。お店を開く、飲食をやりたい人は結構いるのだけど、場所借りて、内装整備して、保健所の許可とってやるのは大変ではないですか。そうすると、シェアキッチンのようなものがあって、お店も出来上がっている、保健所から許可もとってある、そういうところで週に1日だけ借りてやるとなると、失敗してもせいぜい月に数万円とかで済むじゃないですか。毎日違うオーナーだから、違うお客さんがやってくる。そこで、やりたい人がうまく入ってきて、成功すれば、新たにちゃんとしたお店、持てばいいし、失敗すれば引っ込んでも大きな出費にならない。そのような郊外区ならではの新しいチャレンジの仕方があるのではないかな。

田口 人生が多様化して人生のいろんなあり方が、そこで示されてくるってことですよ。

秋元 いまどき、大きく稼がなくていい人も結構いるのですよ。僕なんかも年金、少しもらっているから、今までみたいに稼ぐ必要は全くないのですよ。月々に数万払うぐらいの出費だったとしたら、コーヒー屋さんやりたいなっていう人も結構いるのですよね。別に、もうからなくてもよいて。5万円ぐらいの出費までで、趣味もかねて生活できるのなら、コーヒー屋さんやりたい人は結構いるのですよ。そう考えると、こだわりの店ができてくる可能性もあって。

青木 そうですよ。だからここに書いてある新しい都市デザインなのですね。

秋元 都市デザインの展開だと、僕は思いますよ。今までのようなハード中心でなく、その場所でどういう活動を誘発させるかが大事です。今、タクティカルアーバニズムとか、PPPとか、いろんな用語ができてきているけど、それは都市デザインの展開と言ってしまえばいい、こっちなのですよ。他の市役所では別の言葉で事業化しているけど、横浜では都市デザイン的な活動をしているということで、市民にとってよいことだったら、どういう言葉を使っても良いと思うのですよね。

青木 都市デザインを実現するとなると、それは誰がやるのかなっていう問題が結構大きいんじゃないかなっていうふうに思うのですが。

秋元 横浜でも、都市デザイン室がやることは限られている。あの少ないメンバーでやれる

ことは、限られてしまうから。市民参加の事業とか、イノベーターを育てるとか、他の部局で、都市デザイン系のことをすでにやっているわけですよ。それをどう言うかの話だけだと思います。

田口 もう一つは都市整備の企画でやっているのですたっけ。まち普請は違った概念になっちゃうのですか。今、言おうとしている。

秋元 いや、私は、この都市デザインの中に入っていると思っていますよ。まち普請も入っている。今回の都市デザインの冊子の中でも、都市デザインの内容の中にまち普請も含めています、市民参加の活動も含めて。都市デザイン室がやっているだけでない、都市デザイン的な活動ということで、概念で言えば、もう入っていると思います。

田口 だから、今言ったような、まさにそういうイノベティブなものから、町のあり方、活動の仕方を考えてくると、結構、領域が横断的だし、進行管理っていうのも大変ですね。だからそれこそ、昔から今に至るまで役所になじまないことだと思う。でも、そうはいっても、やはり横浜市として、お金のない中でもそういうことをプロデュースし、支えますよっていうのって結構、組織論としてどうやってやるのかなって感じがしますよね。

秋元 それは非常に難しい問題だと思いますよ、組織論としては確かに。田口さんが言われた通りで、そこはまだ出来上がっていないからこそ、みんな苦労している感じだと思います。横浜市は大きいから、組織がどうしても縦割りになってしまう、その中でやることは、創造都市もそうだし、まち普請も、アーティストや市民に任せて、その発想で事業をやろうとすると、いろんな部局を横断してやらなくてはいけなくなる。まち普請も、僕も担当していたことがあります。例えば、市民から公園の中に防災拠点を作りたいというアイデアが出てくると、公園の部局と市民局の部局とを、うまく整合性をとって誘導していかないと完成しないのですね。そういう仕事はどんどん増えてくる。行政もお金を使わずにやろうとすると市民に動いてもらうしかないし、市民に動いてもらおうとすると、市民は縦割りで物事を考えてないから、それをうまくコーディネートしてあげないとできない。役所の役割もだいぶ変わってくるはずなのだけど、その組織論がまだ全然できていないのですよね。

田口 確かに人材育成論もなかなか難しいですね。

青木 最近の傾向って、ちっちゃな市町村のほうがうまくいっていますよね。

田口 そうそう。そうかもしれない。だから、分かりやすいしね。みんなの顔がすぐ見えちゃうしね。そうだよ。

秋元 横浜市は大きすぎるから、縦割りにならざるを得ない。小さな市町村は、職員が隣の課に異動したって、市民が来たら課が違うから関係ないとは言えないですよ。当然、連携してやってしまう、そうなるのだけ。横浜市ぐらい大きくなると、職員が異動すると市民は二度と会うことはない・・・、なかなか連携は難しいですよ。

青木 そうですよ。

秋元 組織論は、これからどうしていくかというのは、かなり厄介ですよ。

青木 外部に委託するっていうこととか、結構いっぱいあるっていうふうな話を最近聞くので、そうですね。適切な規模とかも難しいんでしょうね。

田口 とは言いながらも、でもその道しかないですよ。だって、ばらまくお金がないのだから。

秋元 市民や企業に動いてもらって、その方向性、ある程度いい方向にまとめてくしかないですからね。お金ないですから。

田口 そうそう。だから、まさに秋元さん言うように、看板代ぐらいしかございませんので、皆さん、お許しくださいという中で、でもちゃんと皆さんのコーディネーター役やりますよ。だから、それでも、相当の目的意識と自覚がないとできないよね。

秋元 それはできないと思いますよ。そこの組織論がまだできていない。横浜市は、東京に近いせいもあり、まだ開発が進んでもいる。ミニバブル的に開発する所もある。IR もやろうとしていたわけですから。一方で人口減少をどうしようか、考えないといけない。アクセルとブレーキを両方、踏んでいるような状況だから、横浜市は今、非常に難しいところですね。

田口 でも今の市長にとっても、単純に言っちゃえば、その道しかないですよ。

秋元 その方向性しかないと思うのですが、まだ就任して時間がたっていないので、そこまでいっていないのではないかと思うのですけどね。

田口 だって、選択肢そんなにないでしょうね。

秋元 そのように組織はっていないですね。横繋がりが十分でない。

青木 大きなビジョンの中でそういうことがあるんだったら、ともかく、まだ試行錯誤の段階ってところですかね。

秋元 このような人口減少社会に入ったのは、この数十年の世界なのだから。今まで高度経済成長の時代をずっと走ってきて、横浜は都市づくりで成功したと言われてきた。まだその時代を踏襲している状況だと思います。大きな変換点がきているはずなのに、その変換点でどう変えるかはまだ暗中模索ですよ、都市づくりの面においては。

田口 だから、創造都市という展開はなくなっていないってことですよ。

秋元 市長が変わると政策が変わるので、市の考える方向性がよく分からないところがあるので、不安ですけどね。

青木 市役所はどう考えているかっていうのはまた別に、アーティストたちは勝手に動き出しているっていう。

秋元 彼らは勝手に動いています。市も、僕がやっていたときの部下が、一巡回って少しずつ元に戻ってきている人もいます。この間の「池田修を偲ぶ6日間」でも、市役所の職員もボランティアで、手伝いに来てもらっています。

青木 そうなんですか。そこで蓄積を学んでもらうのですか。

秋元 創造都市の大切さを、市の職員も、もう一度、考えてほしいですね。

田口 そういうことですよ。だから、仮説ですけど、市のほうが、えらく抵抗すると、どんなことが原因ですか。

秋元 昔と違って、今は、市の職員があまり議論していない気がします、正直言って。上司の指示はよく聞くのですが、そこを、ちゃんと考えられるような職員を増やしていかないといけないですね。六大事業の時、浅田孝さんや田村明さんは、職員がしっかり考えて、自分たちで横浜市という自治体を動かしていこうという意識を植え付けてきているのではないですか。僕も田村さんとは1年ぐらいしか重なってないし、現役の人たちにとっては、歴史上の人物ですよ。だから、その時代を経験した職員は、もういないのです。

田口 そうですね。

秋元 そうなってくると、横浜市は特別でなく、他の市町村と同じような普通の行政として動いている、そのような雰囲気、今の市役所には起きていますね。

田口 最近の役所の中のことは全く分かんないけれど、勝手に勉強会やっているような連中っていないんですか。

秋元 いなくはないです。何人かは僕の所に来て勉強会やりたいという話はきていますので、昔ほど多くはないけど、意識を持った職員もいます。昔はあちこちで勉強会、やっていましたね。

田口 なるほどね。そこら辺か。

青木 田村さんって、でも逆にそこを狙っていたみたいなどころあるじゃないですか。地方自治体が国に逆らってまでやるためには、職員改革みたいなどころを、裏としてはそこを狙っていたところはかなりあるのではないのでしょうか。

田口 そうでしょうね。だって一番、知っているのは、担当だということなんでしょ。だから別に、会議だって説明するのは担当者で。それ、相当、緊張するだろうけど、でも大変な勉強ですよ、そういうのはね。

秋元 その雰囲気がなくなってきましたよね。上司の指示通りにやるのが、公務員としての仕事だという雰囲気が。

田口 やっているような感じになるし。そうか。そうだろうな。でも、そのバリアーとしては一番、大きな問題で大変な問題だけど、せいぜいそこら辺のことで、こういう流れを誰も積極的に否定するような背景や理由はないのですよね。

秋元 大きな流れとしては、昔の飛鳥田一雄市長のように、職員が自治とは何かを考えるような流れはない気がします。でもね、縦割りでしか考えないと、文化観光局は文化としての創造都市しか考えなくなり、大きな意味での都市政策としての創造都市を考えなくなってしまいますね。

田口 アウトですよ、ね。

秋元 創造都市自体が横割りの事業なのに。

田口 これと関係ない話ですけど、すいません。よく分かんないから聞くんですけど、BankART って、これ株式会社ですか。

秋元 NPO です。

田口 NPO の、何だっけ。二つあるじゃないですか。位が高い、認定だっけ。

秋元 認定、取っていると思いますけど・・・。

田口 我々の団体は、その下のやつだから。認証、受けただけ。認定を取ると、公的補助金をもらえたりできるんだけど、その前の段階だと何ももらえないわけですよ。でも BankART さんは、結構これから頑張んなきゃ、秋元さん頑張んなきゃいけないと思うけど、公的補助金ありきで構造はできているんですか。

秋元 だんだん市の補助金は少なくなってきていますが、今は補助金が入っています。

田口 それが、極端な話。補助金がゼロになっちゃったら。

秋元 だんだんと自立していかないといけないという議論はありますよね。

田口 でも自立するっていったら、例えばこういう所にしろ、あそこの駅の所にしろ、市がみんな、賃料払えなんていったら。

秋元 家賃払わなくてはいけないので、その分、稼がなくてはいけませんけどね。

田口 今は払ってないでしょ。

秋元 前は、横浜市が借りていた倉庫を、無償で借り受けていたのですが、今は BankART KAIKO も、BankART Station も、横浜市が賃貸契約に直接絡んでいないので、その分の補助金は増えているのですよ。

田口 払っている、賃料を。

秋元 今は払っています。BankART Studio NYK の時は、横浜市が日本郵船から借りていた

のですが、場所が移ったので、その市の負担していた部分を補助金として振り替えているので、見かけ上は補助金が増えています。見かけ上だけなのですけどね。補助金は、毎年、少しずつ減っていくので、その分、文化庁の助成金をもらうとか、色々な工夫をしながらやりくりしています。持ち込み企画で場所を貸すときも賃料を取っています。NPOなので、コマース系の事業で貸すときは、高く取っていますし、創造都市の事業に会った事業は減免し、若いアーティストにはもっと安く貸すなど、いろいろ差を付けながら、やっています。

田口 じゃあ今のところ、当然、収支は合いながら、頑張っているということですね。

秋元 今のところはですね。カフェをやっているので、この数年はコロナ対策費も頂いています。

田口 なるほどね。それはね。

青木 はい、ありがとうございます。

田口 どうもありがとうございました。

秋元 いえいえ。

(了)